



Title	「ハイピアリアン」と「ハイピアリアンの没落」の同一性と差異性：(2) 共通の詩行について その4
Author(s)	安藤, 幸江
Citation	Osaka Literary Review. 1978, 17, p. 61-70
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25689
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「ハイピアリァン」と「ハイピアリァン の没落」の同一性と差異性

—— (2) 共通の詩行について —— その4

安 藤 幸 江

はじめに

本誌12号, 13号, 15号に続き, この号においても共通の詩行についての考察をすすめて行きます〔16号は筆者の都合で休載〕。

本稿では「ハイピアリァン」第一巻, 126-217行と「没落」第一巻, 430-468行とを比較検討します。この箇所は王位喪失を嘆くサターンがその心情を吐露する情景の続きです。便宜上, 三段に分かちます。

1

「ハイピアリァン」第一巻, 126-134行と, 「没落」第一巻, 430-438行。

「ハイピアリァン」第一巻, 126-134行は, 「没落」第一巻, 430-438行に該当します。これらの詩行はサターンの王位喪失を嘆く最後の言葉で, 再度王位に就くことを夢みているところです。以下, 並列引用しましょう。

- ‘Yes, there must be a golden victory; 126
‘There must be Gods thrown down, and trumpets blown
◦‘Of triumph calm, and hymns of festival
‘Upon the gold clouds metropolitan,
◦‘Voices of soft proclaim, and silver stir 130
‘Of strings in hollow shells; and there shall be
◦‘Beautiful things made new, for the surprise
‘Of the sky-children; I will give command:
‘Thea! Thea! Thea! where is Saturn?’

(*Hyperion*, Book I, 11. 126-134)

Moan, moan, for still I thaw—— or give me help: 430

Throw down those Imps, and give me victory.

Let me hear other groans; and trumpets blown

◦ Of triumph calm, and hymns of festival

From the gold peaks of heaven's high piled clouds;

◦ Voices of soft proclaim, and silver stir 435

Of strings in hollow shells; and let there be

◦ Beautiful things made new, for the surprize

Of the sky-children. '

(*The Fall of Hyperion*, Canto I, 11. 430-438)

御覧の通り、両詩行ともほぼ同じです。文頭の丸印は、勿論、著者のものですが、その詩行が全く同じであることを示しています —— たとえば、「ハイピアリオン」の128行目と「没落」の433行目、前者の130行目と後者の435行目、それに、132行目とそれに対する437行目です。勝利のラッパと宣言、お祝いの讃歌に音楽、新たにされる美しいもの——これらは“soft”と“calm”に象徴されるようにかつての平和な「黄金時代」の再来を謳っています。

これらの詩行を注意深く検討しますと、いくつかの相違が見い出せます。「ハイピアリオン」で、サターンは“there must be a golden victory;/ There must be gods thrown down . . .”と言います。この二回使われている“there must be”は宇宙及び運命に対して秩序に従わねばならないと強く説き、自らにもそう言いきかせるサターンの不屈の精神を表わしています。他方、「没落」において、彼は“Moan, moan; for still I thaw . . .”と言い、自己の悲しみと弱さの中にのめりこみます。そしてまるで子供のように母の助けを求めます。

give me help:

Throw down those Imps, and give me victory.

Let me hear other groans;

これらの詩行は、皆命令文です。しかし、彼は命令しているというよりは哀願しているのです。「ハイピアリオン」においてサターンは自分が王で

なければならぬと自己説得に努めました。これに対し、「没落」では、そのみならず、自己をも捨て、助けを他の人々に求めます。特に、神々の母、ギアの救いを懇願するのです。

個々の表現について述べてみましょう。「ハイピアリアン」127行目“Gods”は、「没落」では、“those Imps”に置き代っています。“Imp”の意味を O. E. D. で調べてみますと、

offspring, child (usually male) *obs.* since 17th c.
exce. as a literary archaism (O. E. D.)

とあります。かくして、“those Imps”とは、サターンの息子達、それも親に刃を向けた息子達、サターン自身の言葉を借りれば、“pernicious babes”なるものです。即ち、オリンピアの神々の謂です。「没落」の次の行、“Let me hear other groans”は、「ハイピアリアン」には全く介在もしません。この場合、“other groans”は、サターンから王座を奪ったジュピターとその兄弟達が、将来サターンによって打ち滅ぼされる時に発せられる敗北の呻き声です。もう一度王になりたいサターンは、その呻き声を聞かせてくれと願います。次の一行半は両詩共に全く同じです。M. アロットは、「ハイピアリアン」129行目、“golden clouds metropolitan”に対して次のような註をつけています。

Miltonic word-order. See, for example, *Paradise Lost* iii 72, ‘the dun Air sublime’, and iv 870, ‘faded splendor wan’. Both phrases occur in passages marked by K. in his copy of Milton.¹⁾

このミルトンの倒置は「没落」434行目で普通の語順になおされます。即ち、“heaven’s high piled clouds”，と。当然、凡庸な表現となつて。

両詩の次の行には“s”の頭韻が見い出されます。“soft”，“silver”，“stir”それに“string”の四つがそれぞれ。一行余に四つの頭韻というのは、キーツにとっても、珍しい限りです。「ハイピアリアン」での“there shall be”と予言の“shall”の使用に対し、「没落」では、“let there be”

と命令文への書き改めがあります。ここにも運命に対する態度の違いが浮き彫りにされます。

次の一行半は両詩全く同じです。この“sky-children”とは、“cherubim”のことです。「没落」はサターンの言葉をここで以て終息させます。しかし、「ハイピアリアン」では、

I will give command:

Thea! Thea! Thea! where is Saturn?

と続きます。これらの言葉は、世界を再び支配したいと思っているにも拘わらず、真実の自己を見い出せないでいるサターンの悲劇的な感情をよく表現しています。サターンにあっては、王位喪失は自己喪失〔＝没落〕に連なるのです。

2

「ハイピアリアン」第一巻、135-149行と「没落」第一巻、438-454行。

これらの詩行を吟味してみましょう。

This passion lifted him upon his feet,	135
And made his hands to struggle in the air,	
His Druid locks to shake and ooze with sweat,	
His eyes to fever out, his voice to cease.	
He stood, and heard not Thea's sobbing deep;	
A little time, and then again he snatch'd	140
Utterance thus.—'But cannot I create?	
'Cannot I form? Cannot I fashion forth	
'Another world, another universe,	
'To overbear and crumble this to nought?	
'Where is another Chaos? Where?' — That word	145
Found way unto Olympus, and made quake	
The rebel three. — Thea was startled up,	
And in her bearing was a sort of hope,	
As thus she quick-voic'd spake, yet full of awe.	

(*Hyperion*. Book I, 11. 135-149)

— so he feebly ceas'd 438
 With such a poor and sickly sounding pause,
 Methought I heard some old man of the earth 440
 Bewailing earthly loss; nor could my eyes
 And ears act with that pleasant unison of sense
 Which marries sweet sound with the grace of form,
 And dolourous accent from a tragic harp
 With large-limb'd visions. More I scrutinized: 445
 Still fix'd he sat beneath the sable trees,
 Whose arms spread straggling in wild serpent forms,
 With leaves all hush'd: his awful presence there
 (Now all was silent) gave a deadly lie
 To what I erewhile heard: only his lips 450
 Trembled amid the white curls of his beard.
 They told the truth, though, round, the snowy-locks
 Hung nobly, as upon the face of heaven
 A midday fleece of clouds.

(*The Fall of Hyperion*, Canto I, 11. 438-454)

これらにおいて両詩、全く違文です。ただ一語“locks”が共通しているだけです(137行と457行)。しかし、それにしてもこれを形容する言葉は異なっています。「ハイピアリアン」での“Druid”は、「没落」の“snowy”に比し、ずっとユニークな表現です。*O. E. D.*をひいてみますと、“Druid”には二つの意味があります。一つは、昔使用されていたもので、

“one of an order of men among the ancient Celts of Gaul and Britain, who, according to Caesar were priests or religious ministers and teachers, but who figure in native Irish and Welsh legend as magicians, sorcerers, soothsayers, and the like”

です。それは、シーザーに依ると宗教的な役割を果たした牧師のようなものとして、アイルランドやウェールズの伝説によれば、魔術師、予言者のたぐいのもの、と考えられている古代ケルト族のいわゆる「祭師」でありましょう。もう一つは、現代的な意味で、“a. A priest, religious minister, chaplain. b. A philosophic bard or poet.”

a の方の意味は、古代のそれを継受しているものであり、それからの派生と思われますが、b は詩人を含蓄しています。私は、キーツが彼の“Druid”において、二重のイメージを抱いていたものと思います。即ち、古代の祭師であり、かつは詩人をです。この“Druid locks”に、M. アロットは次のように註します。

Long haired like a Druid. The adjective suggests that K. is recalling Gray's *The Bard* 17-20,

Robed in the sable garb of woe,
With haggard eyes the Poet stood;

(Loose his beard, and hoary hair
Stream'd, like a meteor, to the troubled air) . . .²⁾

単に長髪と言ってしまうので、“Druid locks”ということによって、“Druid”の含蓄するイメージとサターンのとがダブって、詩的効果をあげています。

「ハイピアリアン」でキーツは“passion”, “struggle”そして“snatch'd”というような力強い言葉を使っています。通常の文章では“snatch utterance”ではなくて、“give utterance”というのが普通でしょう。この“snatch'd utterance”は、あらゆる努力を傾けてこの一瞬を我が物にしようとするサターンの緊迫した感情をよく表わしています。私はこの表現はこの状況にも、又王者の風格をまだ失っていないサターンにもよく合っていて、とても効果的なものと思います。キーツは本当に際立った「言葉の職人」“craftsman of words”という感じがします。「ハイピアリアン」で、サターンは言います。

cannot I create?

'Cannot I form? Cannot I fashion forth

'Another world, another universe,

'To overbear and crumble this to nought?

これらの言葉は運命に対する彼の積極性を表わしています。そしてジュピ

ター、ネプチューン、プルートーの三兄弟を震え上がらせませす。この三人はサターンの王国を自分達の間で分割し、それぞれ天と海と地下とを支配しています。“create”, “form”, そして “fashion forth” というような「作る」という意味の同義語を繰り返すことによって、キーツはサターンの会話をこの上なく強調しています。これにて私達はサターンの力強く積極的な姿を想像します。そして、勿論, “overbear” と “crumble” という力づくで相手を倒すという強烈な印象の動詞は、王位を喪失しても尚サターンの剛健さを残していることを示しています。

これに反して、「没落」の “feebly”, “poor” と “sickly” は、サターンの弱々しい心的状況を表出しています。彼は、全財産を失い、嘆いている地上の老人に譬えられます。キーツは現在自分が見ているものが信じられないことを述べるために美しい隠喩を使っています。即ち, “that pleasant unison of sense / Which marries sweet sound with the grace of form . . .” “Unison” は, “exact or perfect agreement, concord, or harmony; harmonious combination or union” (O. E. D.) の意味です。事実, O. E. D. はキーツのこの詩行を引用しています。「快い音」は「優美な姿」に調和し, 「悲しみのハープの奏でる哀愁の調べ」は「巨人の幻」に似つかわしいものです。しかし、サターンの衰れな言葉は彼の厳かな姿に相応しくありません。

序でながら、H. W. ギャロッドの版によれば, “yet full of awe” の後にはピリオドがあり、一行空白があります。³⁾ところが、M. アロット版ではこの句の後にはセミコロンでスィーアの言葉へと続いて行きます。⁴⁾これはギャロッドが1820年版のテキストに従っているのに対して、アロットはキーツの直筆原稿に従い1820年版の “paragraph division” を削除したからです。スティリンジャーによれば、キーツの直筆原稿をウッドハウスが写し (W²), それをまたウッドハウスの部下が写し (W¹), これが1820年版となったとのこと。5)

3

「ハイピアリオン」第一巻、150-157行と、「没落」第一巻、454-468行。

これらの詩行は全く違っています。

‘This cheers our fallen house: come to our friends, 150
 ‘O Saturn! come away, and give them heart;
 ‘I know the covert, for thence came I hither.’
 Thus brief; then with beseeching eyes she went
 With backward footing through the shade a space:
 He follow’d, and she turn’d to lead the way 155
 Through aged boughs, that yielded like the mist
 Which eagles cleave upmounting from their nest.
 (*Hyperion*, Book I, 11. 150-157)

Thoea arose, 454
 And stretch’d her white arm through the hollow dark,
 Pointing some whither: whereat he too rose
 Like a vast giant seen by men at sea
 To grow pale from the waves at dull midnight.
 They melted from my sight into the woods:
 Ere I could turn, Moneta cried — ‘These twain 460
 Are speeding to the families of grief,
 Where roof’d in by black rocks they waste in pain
 And darkness for no hope.’ — And she spake on,
 As ye may read who can unwearied pass
 Onward from the Antichamber of this dream, 465
 Where even at the open doors awhile
 I must delay, and glean my memory
 Of her high phrase: — perhaps no further dare.
 (*The Fall of Hyperion*, Canto I, 11. 454-468)

「ハイピアリオン」では、サターンの積極的な言葉にスィーアは一種の希望を抱き、彼に仲間のタイタン達に勇気を与えてくれるように頼みます。彼女は“came I hither”と言って、“here”とは言いません。現在では

“hither”は文学的にだけ使われて、普通の会話では“here”が取って代りました。この詩は“iambic pentameter”，即ち、弱強五歩格です。“hither”を使うと、一音節長くなりますが、キーツは敢えてこの語を採用しています。それはこの語の使用によって古代の雰囲気を出そうと意図したからでしょう。「没落」456行目に“wither”というのがありますが、この場合、音節の数は10です。スィーアは彼をタイタン達の悲しみに満ちた隠れ家へと導びいてゆきます。詩人は、通常の語順の“footing a space through the shade”を“footing through the shade a space”と修辭的効果を上げるために変えました。彼らが歩んで行く時、古い枝々は彼らのために霧の如く道をあけます。この比喩はサターンの神々の王としての威厳を表わしています。

「没落」454行目の“Thoea”に注目しましょう。私はこの詩行をギャロッド版から引用しました。彼は“Thea”というのは *Another Version of Keats' 'Hyperion', 1856* に書かれていて、“Thoea”は Crew House quarto: *Transcripts and Records* と Crew House quarto: *Woodhouse Transcripts. Poems II*, に書かれていると述べています。⁶⁾ しかし、M. アロットの版⁷⁾でも E. De セリンコートの版⁸⁾でも“Thea”が印刷されていますし、ギャロッド版でも「没落」の335行目では“Thea”であって、“Thoea”ではありませんので、私はこの小論では“Thea”を使いました。

キーツは「没落」においても、サターンとスィーアが望みのない没落した仲間のタイタン達の所へ行くと語っています。サターンは海の怪物に譬えられていますが、これはかなりグロテスクな比喩に思われます。サターンとスィーアの姿が消えると、モネータはキーツに彼らのことについて“high phrase”で説明します。O. E. D. を引きますと、“high”は“of exalted rank, station, dignity, position, or estimation (of person, or their attributes; also with emphatic force, in high God, high heaven)”，とあります。モネータは“high God”ですから、彼女の言葉もまた“high”，即ち，“of exalted quality, character, or style; of

lofty, elevated, or superior kind; high-class" (*O. E. D.*), なのでしょう。しかし, "high" には別の意味があります。この辞書によれば,

advanced, abstruse, difficult to comprehend. a. 1533 *Ld. Berners Gold. Bk. M. Aurel* (1546) *Dij*, so high sentences, as he wrot.

とあります。"High sentences" と "high phrase" は同じような言葉の使い方です。私はキーツはこの二つの意味合いを籠めて "high" という言葉を使用したと思いますが, どちらかといえば前者よりも後者の意味の方がふさわしいように思えます。事実, キーツは彼の記憶を凝集しようと努力しますが, そうすることができません。彼は書くのを止め, ここで第一巻を終えています。

註

- 1) *The Poems of John Keats*, ed. by Miriam Allott (1st ed. ; London: Longman, 1970), p. 404.
- 2) *Ibid.*, p. 404.
- 3) *The Poetical Works of John Keats*, ed. by H. W. Garrod (2nd ed. ; Oxford: the Clarendon Press, 1966), p. 281.
- 4) M. Allott, p. 405.
- 5) Jack Stillinger: *The Texts of Keats's Poems*, (Cambridge, Massachusetts, Harvard University Press, 1974,) pp. 230-232.
- 6) H. W. Garrod, p. 521.
- 7) M. Allott, p. 682.
- 8) *The Poems of John Keats*, ed. by E. De Selincourt (8th ed. ; London: Methuen 1961), p. 239.